

O-1-27 Type IIの時期にGBRを行ないインプラント埋入をしたケース

A case in which an implant was placed after performing GBR during the Type II stage

○岡 吉孝¹⁾, 奥寺 俊允¹⁾, 橋口 隼人¹⁾, 安齋 聡¹⁾, 佐藤 宏美¹⁾, 安齋 崇²⁾, 洪 性文³⁾
OOKA Y¹⁾, OKUDERA T¹⁾, HASHIGUCHI H¹⁾, ANZAI S¹⁾, SATO H¹⁾, ANZAI T²⁾, HONG S³⁾

¹⁾ 東京形成歯科研究会, ²⁾ 順天堂大学医学部耳鼻咽喉科学講座, ³⁾ 日本インプラント臨床研究会

¹⁾ Tokyo Plastic Dental Society,

²⁾ Department of Otorhinolaryngology Juntendo University Faculty of Medicine,

³⁾ Clinical Implant Society of Japan

I 目的: インプラント治療は広く普及し信頼性の高い治療と言えるが、埋入部位のコンディションによってその難易度は異なる。抜歯後のインプラント埋入時期は第3回ITIコンセンサス会議においてType1～Type4に分類されている。抜歯窩の歯槽骨破壊が、ほとんど無い場合にはType1の即時埋入が可能だが、大きく破壊されている場合にはType4の完全に治癒した部位に対する遅延埋入になる時もある。その場合、抜歯窩は完全治癒するが、水平的垂直的骨量が大きく減少してしまう。今回、抜歯後8週のType2の軟組織治癒を伴う時期にGBRをすることによって水平的垂直的骨量を回復した後にインプラントを埋入した症例を報告する。

II 症例の概要: 患者は44歳女性で#36部の疼痛を主訴に来院。既往歴に特記事項はなし。パノラマX線写真とデンタルX線写真から抜歯の必要性を説明したのちに、抜歯後の欠損補綴治療に義歯、ブリッジ、インプラントのそれぞれのメリットとデメリットを説明したところ、インプラント治療を希望され患者の同意を得た。歯周基本治療をした後の抜歯後8週で

GBRを行い、6か月後にインプラント埋入を行った、その後3か月の免荷期間の経て上部構造の装着を行なった。

III 考察および結論: 現在インプラント周囲に炎症所見は認めず、パノラマエックス線所見においてもインプラント周囲の骨吸収像もなく良好な経過を示している。Type2の軟組織治癒を伴う時期にGBRをすることによって比較的容易に水平的垂直的骨量を回復することができた。抜歯窩の歯槽骨の状態によって、介入時期を変える必要がある。(治療はインフォームドコンセントを得て実施。発表についても患者の同意を得た。)